

平成三十年度

前期日程

国語問題 (H・F・J・E)

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計六か所)に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十五ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用紙は三枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

トクヴィルは一八三一年春から三二年春までの約十カ月、ジャクソニアン・デモクラシー下の米国を旅している。この旅によつて自由の有無がいかに人間の生活を変え、自由の侵害がいかなる社会的・経済的な帰結をもたらすのかを実感し、帰国後十分な歳月を費やして『アメリカのデモクラシー』(第一巻、一八三五年、第二巻、一八四〇年)を著わした。一八三〇年代の米国では、北部諸州の奴隷制はすでに廃止されていたが、南部では奴隷制が過酷さを増していた。同書第一巻・第二部最後の長大な第十章「合衆国の国土に住む三つの人種の現状と予想されるその将来に関する若干の考察」の「黒人人種が合衆国の中に占める位置、その存在が白人にもたらす危険」と題する節は、自由な労働と奴隷労働の比較を通して、現代社会にも多くの示唆を与えている。特に、政治経済体制の違いによつて、人間の存在そのものと密接に関わる労働の持つ意味や目的、そして形態が異なってくるという点を明らかにした意義は大きい。

まず彼が注目したのは、奴隷の少ない州ほど、人口と富が増大しているという点であつた。北部では農場主は自分で耕すか、外部から労働力を有償で調達しなければならなかつた。他方、南部では維持と再生産の費用を除くとほとんど無償の労働力(すなわち奴隷)が調達できた。にもかかわらず、⁽¹⁾なぜ北部州の方が経済的に豊かなのか。トクヴィルはこの問いに、自由労働なのか、あるいは奴隷労働なのかに注目しつつ、鋭い洞察をもつて答えている。比較の例として挙げられたのは、オハイオ州とケンタッキー州である。

オハイオ川とエリー湖に囲まれたオハイオ州は、一七八七年に建設され、一八〇三年に連邦に十七番目の州として加入、アメリカが独立を成し遂げた後に獲得した北西部領地から生まれた最初の州である。農業も盛んであつたが歴史的には全米有数の工業州に成長し、(中西部・西部諸州の中では)都市的性格の強い州として発展していた。

一方のケンタッキー州は、一七七五年に建設され、一七八三年パリ条約によつて合衆国領となり、一七九二年に第十五番目の州として連邦に加入している。石炭の産地として知られていたものの、工業化は遅れ、農業面でも先進性はなかつた。このようにケンタッキー州の方がオハイオ州よりも誕生が十二年古い。しかし一八三〇年のセンサスでは、オハイオ州の人口は約

九三万、ケンタッキー州は約六八万、と、若いオハイオ州の方が人口で二五万人以上多くなっている。自由労働のオハイオ州の方が豊かで人口の増加が速かったのだ。

オハイオ川を挟んだこれら二つの州、オハイオ州(自由州)とケンタッキー州(奴隷州)を対比させたトクヴィルの鋭い観察と、詩的で美しい表現を松本礼二氏の訳(岩波文庫版)から何力所か引用してみよう。

「オハイオ川の兩岸には起伏のある土地が広がり、土壌は毎日農夫にその尽きざる恵みを与える。どちら側でも空気は同じように清浄で、気候は温暖である。兩岸がそれぞれ大きな州の境界をなしている。オハイオ川の流れが刻む限りない蛇行に沿って左岸の州はケンタッキーと呼ばれる。もう一つの州はその川自体から名をとった」

これら二つの州(ケンタッキーとオハイオ)の相違は、ケンタッキー州が奴隷を許容し、オハイオ州はこれをすべて拒否したというただ一点のみある。したがって、

「オハイオ川の真ん中をミシシッピに合流するまで流れにまかせて下る旅人は、いわば自由と隷従の境界を航海することになる。そうした旅人は周囲に目をめぐらすだけで、どちらが人間にとって有利であるか、たちどころに判断できる」

多くの条件がコントロールされた、まさに経済体制を比較するための絶好のサンプルがここにあるとトクヴィルは見ているのだ。

「左岸(すなわちケンタッキー州―筆者注)では、人口は疎^(a)らである。ときどき、奴隷の一群が半ば荒れ果てた畑を注意散漫に歩くのが見える。原始林が絶えず姿を現す。社会はまるで眠っているようだ。人は暇をもて余しているように見え、自然が活発で生き生きした姿を示す」

反対に右岸のオハイオ州では、

「産業の存在を遠くまで宣言する騒音が鳴り響いている。豊かな実りが畑を覆い、^(b)瀟洒な住まいが農夫の趣味のよさと手入れのよさを窺^(c)わせる。至るところに豊かさが^(d)滲み出、人は裕福で満足しているように見える。彼は働いているのである」

この「彼は働いているのである」という言葉は、見事に自由な労働と生き活きた人間の感情の関係を捉えている。奴隷州と自由州とのこうした活力の差を、トクヴィルは古代の文明と今日の文明との間に見られる多くの相違とのアナロジーで理解する。

「オハイオ川の左岸では、労働は奴隷制の観念と混同されている。右岸では安楽と進歩の観念と一体である。かしこではそれは不名誉だが、こなたでは称賛的である。その川の左岸では白人人種に属する労働者は見つからない。いたとしても、彼らは働いて奴隷に見られるのを恐れるであろう。黒人の労働に頼るほかはない。右岸では^(e)閑人を探そうとしても無駄である。白人は活力と知力を傾けてあらゆる仕事に手をのばす」

ケンタッキー州では耕作に当たる人々には熱意と知識がないのだ。ケンタッキーでは主人たちは奴隷を働かせても、賃金を払う義務はない。しかし奴隷の労働からはほとんど成果が引き出せない。熱意と知識を持っている人々は何もしないか、自分の技術を生かし、恥じることなくこれを行使できるように対岸のオハイオに渡るのだ。オハイオ州では、自由な労働者に金を与えれば、それは生産物の値段に「利息付で戻ってくる」。なぜなら、自由な労働者は有給だが、奴隷より仕事が速い。白人は労力を売りに出すが、人がこれを買うのはそれが役に立つときだけである。

「自由な労働者は賃金を受け取る。奴隷は教育を受け、食料をあてがわれ、保護を受け、衣服を支給される。主人が奴隷の保持のためにする金の消費は少しずつ、細々と続き、なかなか気づかない。労働者に支払う賃金は一時に出ていき、受領者を豊かにするだけのように見える。だが実際には、奴隷の方が自由な人間を雇うより高くつき、奴隷の労働の方が生産性が低い」

⁽²⁾ 奴隷の仕事が結局は高くつくことは、アダム・スミスが『国富論』の中で指摘している。自由な労働と奴隷労働は、経済社会の姿と個々の労働者のメンタリティーにかくも大きな違いをもたらすという点を、トクヴィルも鋭く見抜いているのである。この洞察こそ、二十世紀の社会主義国家の多くが経験した事実を予言するが如き体制論的な考察となっている。

自由経済と計画経済を対比させた「比較体制論」には、どのような現代⁽³⁾的な意味があるのだろうか。二十世紀はじめに「ソビエト連邦」という社会主義国家が誕生して以来、政治・経済体制の長所短所を「比較」の視点から論究する分野が多くの研究者の関心を集めてきた。異なった体制が長期的な競争をすれば、どちらが、いかなる理由で生き残れるのかという問題意識がそのベースにあつた。少なくとも、市場が生み出す「価格」に含まれる情報と、市場の需給調整機能を無視した社会主義計画経済が、自由競争の経済システムの前にあえなく敗退したことは、一九八九年の「ベルリンの壁の崩壊」が象徴的に示している。しかしその後、現代中国のような、経済は基本的に市場システム、政治は（共産党の党官僚による）一党独裁という、自由と専制の入り混じった文字通りの「混合体制」が出現したため、その体制の持続可能性と長期的なパフォーマンスの優劣が改めて問われるようになった。比較体制論は議論の枠組みを変え、装いを改めて復活したのである。

（猪木武徳『自由の条件―スミス・トクヴィル・福沢諭吉の思想的系譜』（二〇一六年）より。出題の都合により一部改変した箇所がある。）

問一 傍線部(a)～(e)の漢字をひらがなに直しなさい。

(a) 疎ら

(b) 瀟洒

(c) 窺わせる

(d) 滲み

(e) 閑人

問二 傍線部(1)「なぜ北部州の方が経済的に豊かなのか」という問いに答えるため、トクヴィルはオハイオ州とケンタッキー州とで比較を行っている。トクヴィルがこの二つの州で比較を行ったことが妥当だといえる理由を、本文に沿って一〇〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(2)「奴隷の仕事が結局は高くつく」とあるが、なぜそう言えるのか。自由な労働者のケースと対比しながら、一五〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(3)「現代的な意味」の内容を、本文中の言葉を用いて七〇字以内でまとめなさい。

II

以下の文章の筆者は、哲学の謎の前で「引き裂かれる私自身をなるべくそのままの状態で示す」ために、「三人の私がかげあいで進んでいく形式」で文章を書いている。このことを踏まえたうえで、以下の文章を読んで、後の問い(問一～問五)に答えなさい。

猫の顔洗いは行為なのか

——明日は雨だな。

どうして？

——ほら、あの猫、念入りに顔洗ってるだろ。

前脚で顔をこするあの動作は顔を洗っているのか。

——そう言うけどね。それで、いつもより念入りだと、雨になる。

ところで、あの動作は猫の為している行為なのだろうか。君、どう思う？

——どういう意味？ 行為なんじゃないの？

眠気に誘われて思わずあくびをするとき、あくびは行為かな。

——わざとじゃなくて、自然に出ちゃった場合？

そう。

——自然に出ちゃったんなら、生理現象だから、行為とは言えないだろうね。

猫の顔洗いや自然に出たことではないのだろうか。

——そうかもしれない。すると……

行為ではない。

——でも、猫のやることなんて、たいていは自然にそうなっちゃうものでしょう。

だから猫は行為しない。それはたんなる自然現象にすぎず、例えば枯葉が舞い落ちるのが枯葉の行為ではないように、それは猫の行為ではない。

(1) — ミジンコとかミミズならともかく、猫の動きがたんなる自然現象だつてのは、ちよつとついでいけいな。猫の動きはミミズより複雑というにすぎないのではないだろうか。

— 人間はどうなつちゃうのさ。

人間もまた自然の存在にすぎないとみなすのであれば、人間のふるまいはもはや行為ではない。

— でも、そうしたら「行為」なんかどこにもなくなつちゃうじゃないか。
そうなる。

— それはむちゃだよ。例えば、自然に出たあくびなら行為じゃないだろうけど、わざとあくびするなら行為だよ。ふつうはそうだろう。

— だったら、すべては行為じゃないなんて突き放しちゃうんじゃないかって、その微妙なところをもう少し考えてみようよ。君が変なこと言うもんだから、行為と行為じゃないことの区別がどこでつくのか、⁽²⁾ なんかモヤモヤしてきちゃった。

意志という動力

どうも私には行為と非行為との区別がうまく説明できないように思える。たんに複雑さの違いぐらいしか言えないのではないか。ミミズと人間の違いだけではない。枯葉が舞い落ちることと、私が歩いたり、手を上げてアイサツすること。これらはどこが違うのか。

— 枯葉の動きと人間の動きがどう違うか分からないっていうの？
分からないというより、違いがうまく言えないのだ。

— 全然違うじゃない。

どこが？

——ぼくが腕を上げるときには意志があるよね。
意志するという心の働き？

——うん。

そこが問題だ。そんな心の働きがあるのだろうか。

——君には意志がないっていうわけ？

ない。私だけでなく、君にも。

——そんなばかな。

では、腕を上げようと意志してみてくださいるかな。

——そりゃ、まあ、え……と。「よし腕を上げよう」……って言ってみただけか。

そう。意志することなくたんに言ってみるのではだめだ。

——「腕を上げよう」って精神集中するんじゃ、だめかね。

まるで念力で腕を上げるみたいだね。ふだんそういう力んだ生活をしているの？

——まさか。

腕を上げてみて。

——ほい。

いま君は自分の意志で腕を上げた。ならば、そこに意志するという心の状態が伴っていたはずだ。では、それを再現してみればいい。それはどういう心の状態だったのか。

——そう言われると、分からなくなるな。

つまり、意志なる心の状態など、ないのだ。

——でも、何か「意志する」としか言いようのない心の状態があるんじゃない？

あるとして考えてみよう。つまり、意志するという心の状態があり、それが動力となって君の腕が上がる。

——うん。

その心の状態は、自然に生じたものだろうか。

——どういうこと？

例えば、暗闇で突然何かが見われ、君に恐怖という心の状態が生じ、君は反射的に飛び上がる。これは君の意志行為ではないね？

——恐怖のあまり思わず飛び上がったのならね。

同様に、状況にウナガされて自然に意志なる心の状態が生じ、それが原因で君の腕が上がるとすると、やはり君は終始

① 的な立場にあり、すべては自然のなりゆきということになる。いわば、「意志のあまり、思わず腕が上がってしまった」のだ。

——それ、むちゃくちゃだよ。

しかし、もし意志が君のオモワクとは別に自然に生じてそれで腕が上がるならば、そういうことになってしまっているのではないかな。

——だからもちろん、ぼくは腕を上げようと意志したりしなかったりできるといふことさ。つまり、意志は① 的な

心の動きじゃなくて、ぼくの② 的な心の動きだ。

すると、意志は君が② 的に為しうる一種の行為ということになる。

——まあ、「恐怖する」とは言わないけど、「意志する」とは言うからね。

恐怖にはなくて意志にはあるという、その「② 性」というのは何なのだろう。

——なんか、きな臭くなってきたな。

君は意志という心の状態を君自身の力で引き起こさなくてはならない。そうだね。

—— だろうね。

チェックメイトだ。

—— 詰んじゃったの？

読めない？

—— うん。

君が腕を上げるとき、君は君自身の力で君の腕を上げなければならない。つまり、それは君の意志が動力となって生じた動きでなければならない。これがまず、一手目。

—— やな感じだな。

さらに、その意志もまた君自身の力で引き起こしたものでなければならない。つまり、「腕を上げよう」という意志も、再び君の意志が動力となって生じた心の動きでなければならない。これが二手目。

—— 意志することの ② 性を言うために、「意志することを意志する」と言わなければいけないってわけ？

行為の ② 性を意志に求めるかぎり、そうなる。そして、意志の意志を出してもそこで終わりにならないことは明らかだ。二番目の意志の ② 性を言うために君は三番目の意志を持ち出さねばならず、以下、無限に続く。三手詰め。

—— 無限に続いちゃ、やっぱりだめかな。

腕を上げるために無限に意志しなければならないなんて話、誰が信じるだろう。それに、無限に遡らねばならないというのは、腕を上げることをごどこから始めればよいのか、行為を始めることも不可能になる。

—— 詰んだ、のかな……。

詰んだと思う。⁽³⁾「動力としての意志」は行為と非行為の相違を説明してくれない。

(野矢茂樹『哲学の謎』(一九九六年)より。)

問一 傍線部(a)と(c)のカタカナを漢字に直しなさい。

(a) アイサツ (b) ウナガ (c) オモワケ

問二 空欄①と②には対になる言葉が入る。それぞれ漢字二文字で答えなさい。

問三 傍線部(1)について、「ちよつとついでいけない」ということの意味を、八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(2)について、「モヤモヤしてきちや」うのはなぜか。八〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(3)について、「説明してくれない」とはどのような意味か。傍線部(3)のように言える理由とともに一五〇字以内で説明しなさい。

III

次の文章は『和泉式部日記』の一節で、宮と女との恋をめぐるやりとりが描かれている。この文章を読んで、後の問い(問一、問六)に答えなさい。

宮も、言ふかひならず、つれづれの慰めにとはおほすに、ある人々聞こゆるやう、「このころは、源少将げんせうしやうなむいますなる。昼もいますなり」と言へば、また、「治部卿ちぶきやうもおほすなるは」など、口々聞こゆれば、いとあはあはしうおぼされて、久しう御文もなし。

(注1) 小舎人童こどねりわらは来たり。桶洗童ひづまじわらは、例も語らへば、ものなど言ひて、「御文やある」と言へば、「さもあらず。ひと夜おはしましたりに、御門に車のありしを御覧じて、御消息せうそくもなきにこそはあめれ。人おはしまし通ふやうにこそ聞(a)こしめしげなれ」など言ひて去ぬ。

かくなむ言ふ、と聞こえて、いと久しう、なによかよと聞(b)こえさすることもなく、わざと頼みきこゆることこそなけれ、時々もかくおぼし出でむほどは絶えであらむとこそ思ひつれ。ことしもこそあれ、かくけしからぬことにつけてかくおぼされぬと思ふに、身も心憂くて、なぞもかく、と嘆くほどに、御文あり。

「日ころは、あやしき乱り心地のなやましさになむ。いつぞやも参り来て侍りしかど、折悪しうてのみ帰れば、いと人げなき心地してなむ。」

(A) よしやよし今はうらみじ磯に出でてこそ離れ行くあまの小舟を「
とあれば、あさましきことどもを聞(c)こしめしたるに、聞(d)こえさせむも恥づかしけれど、このたびばかりとて、
(B) 袖のうらにただわがやくとしほたれて舟流したるあまとこそなれ
と聞こえさせし。」

(注1) 小舎人童 こどねりわらは 貴人のもとで、雑用をつとめる少年。

(注2) 樋洗童 ひすましわらは 下々の用事をする下女。

問一 傍線部(a)～(d)について、文脈に沿うように、主語を補って現代語訳しなさい。

問二 傍線部(ア)「いと人げなき心地してなむ」とあるが、なぜそのような心地がしたのか、説明しなさい。

問三 和歌(A)で用いられている縁語をすべて答えなさい。

問四 和歌(A)を、比喩表現をふまえて、現代語訳しなさい。

問五 傍線部(イ)「あさましきことども」について、次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 「あさましきことども」と同じことを指す言葉を、文中から書き抜きなさい。

(2) 「あさましきことども」とは、具体的にどういうことか、説明しなさい。

問六 和歌(B)を、比喩表現をふまえて、現代語訳しなさい。